

---

# 狂氣を狩る者

木漏れ日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂氣を狩る者

### 【NZコード】

N6491F

### 【作者名】

木漏れ日

### 【あらすじ】

これは、私達の世界よりも少しだけ文明が進んだ、全く別の世界の物語。命とは最早人間が造り出せてしまうもの。それが当たり前になってしまった、狂った世界。そんな世界で生きる、一人の少年

ケルン・カーサヴェルゼ。表向きは只の高校生。しかし、裏の世界では知らない者はいない、政府御用達の「狂氣」専門のハンター。その常人離れした身体能力と、卓越した戦闘技術で「狂氣」を狩る者。これは、彼の表と裏、両方の日常を第三者の目線から綴つた、異世界で繰り広げられる奇妙な物語。

満月が、闇に染まつた世界を照らしている

深夜だといつのに、その光は人工の光など必要としないくらい明るく。

故に、その光に照らされ伸びた二つの影の行動は、はつきりとこの大地に刻まれていた。

銃声が、夜の廃墟に響き渡る。

『ギャウッ！－！』

悲鳴と共に。

そして、

ゴラ…ゴラ…ゴラ…

ゆっくりと、その悲鳴の発信源に向かって近づいてゆく、重々しい足音。

『力アアアアツツ！…!』

悲鳴を上げた【何か】が、脇腹から血を流し、埃の積もった床に這いつくばりながらも、足音の主に向けて牙を剥き、威嚇する。

しかし、足音の主はそれを気にも留めず、【何か】に向けて再度銃を向け、発砲する。

『ガアウウアアアツ！…!』

撃たれた【何か】の腕が、肩から千切れ飛び。

這いつくばっていた状態からバランスを崩した【何か】は、埃を巻き上げながら、自らの血で出来た血溜まり中でのたうちまわつていた。

雲が月を隠し、光が遮られる。

深い闇の中で、足音の主は【何か】に向け、静かに咳く。

「…………すまない」

この惨劇の創造主にはあまりに似つかわしくないその男の言葉に、激しく暴れていた【何か】が動きを止め、低く低く、唸るように返す。

『二クイ……二クイ……二クイ、二クイ二クイ二クイ二クイッ……オノレニツクキニンゲンメガツツ……!』

廃墟に響き渡る、激しい憤怒の咆哮。並の人間であれば、気を失つてもおかしくは無い。

が、足音の主は、ただ【何か】に歩み寄る足を止めただけで、咆哮に対しては怯んだ様子すら見せない。

さうに憤怒の咆哮が続く。

『『コレガ……コレガ貴様ラ人間ノヤリカタ力！？我等ヲウミダシタノハ、貴様ラ人間タチデハナイカ！！ナゼ我等ノ命ヲネラウ！？ナゼ我等ヲ殺スノダ！！！』

「…………」

男は、黙つたまま【何か】に向けていた銃を下ろし、ホルスターに仕舞う。

「…………すまない」

再度同じ台詞を繰り返し、男は踵を反し、【何か】に背を向けて歩き出した。

自分に背を向けて歩く男の後ろ姿は、まるで隙だらけに見える。【何か】には、そう見えてしまった。

故に、その姿を見た【何か】には、

「今之内に逃げる」という選択肢は浮かばなかつた。

せつままでの憤怒の表情を醜い笑みに歪め、残る三肢に力を込め跳躍。驚異的な脚力により一瞬で距離を詰めると、鋭利な歯が並ぶ口を男の首筋にめがけて開く。

すると、口の中に向こうから何かが飛び込んできた。固さからして男の首筋ではないことが分かる。

『……ツー！？』

飛び込んできたのは、

男の靴裏だった。

それも、凄まじい破壊力を連れて。

『ゴオッ…………！…』

あまりの威力に歯は全て砕け散り、【何か】は空中で後ろに一回転させられる。その間、

チンッ

と、小気味良い音を聞いたのを最後に、【何か】の意識は途切れた。

そして、一度と意識が戻ることは無かった。

~~~~~

「なぜ我等を殺す、か  
」

二〇の關一  
關中書

月が顔を出し、男を薄く照らし出す。

浮かび上がったのは、絶対零度を思わせる蒼い瞳。それとは対極に、燃えるような朱に近い金の長髪。それを、宝石を散りばめた銀糸で一纏めにしている。

その容姿は、見る者によつては女性に見紛うだらう。キメの細かい肌に整つた顔立ちは線が細く、男性的な厳ついイメージとは程遠かつた。

それは、人間と近い形状をしていながら、人とは全く異なる異質なモノ。

眼には瞼が無く、唇も無い。全て砕け散っているが、歯は剥き出し

の状態だ。

残る三肢は丸太のように太く、長い。そこから生み出される脅力は半端ではないことが伺える。

指は三本しか付いていないが、その一本一本はやはり太く、長い。大人の頭でさえ容易に握り潰すだろう。

服は着ておらず、濁つたヘドロのような色をした肌は外気に晒されていた。性器が付いていないところを見ると、隠す必要がないのだろう。大口を開けたまま息絶えるその姿は、正に異形の者。見る者に恐怖を与える、化け物だった。

男は、その凍てつく瞳に何の感情も映す事無く、化け物の亡骸を見下ろし、呟く。

「確かにお前自体に怨みは無いが……理由は簡単だ」

化け物の身体の正中線に、縦に朱の線が走る。

「お前等が憎いからだよ」

男は今度こそ化け物に背を向け、歩き出す。

廃墟に響く足音はやがて遠ざかり、その姿は月の光の届かない、深い闇の中に消えていった。

じまじくして、誰も居なくなつた廃墟に、液体が【何か】か  
ら溢れる音と、【何か】が擦れながらずれる音が虚しく響いた……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6491f/>

---

狂気を狩る者

2010年12月26日14時12分発行